

Arupの熱い構造家

柴田育秀

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■強くて柔軟

「変わり種です」と、自身をいうのは、Arup東京事務所でビルディング・エンジニアリングリーダーの重責を担う柴田育秀さん。茨城大学工学部の都市システム工学科卒。山の手の景観をどのようにしようかという、構造とは無縁な勉強をした。が、そんな学生時代に、「叔父さんの経営する建設会社で現場管理のアルバイトをしていた」ので、建築現場には慣れていたので。建築家になりたいと思っていたので、設計会社に入社した。が、会社の都合で「設備か構造」を選ぶことになる。将来建築家になるには構造がいいだろうと決めて、「ほんとに20代は死ぬ程仕事をしました」。日々の実践で構造をモノにしたのだった。そのときの状況を柔軟にとらえ、決めたらとことんやる。それが柴田育秀さん流の生き方だ。

■エンジニアとして

1992年の建築文化2月号「建築とエンジニアリング オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズの世界」で詳しくArupを知り、俄然興味を引かれた。そして、まだ数名のスタッフしかいないArup東京事務所に入る。Arupでの最初の仕事が、ビックパレットふくしま（1998年・設計/北川原温）。豊田スタジアム（2001年・設計/黒川紀章）では第13回JSCA賞の作品賞を受賞したのだ。大御所建築家との仕事が多い柴田さんだが、若い建築家との仕事にも燃える。第10回（2015年）構造デザイン賞を受賞したRibbon Chapelは、若手建築家の中村拓志さんの設計。建築の質を徹底的に追求する人だったと振り返る。柴田さんの手がけた中で一番小規模の建築がこの作品。建築家の藤本壮介さんとも深くかかわっていた時期があった。共同作業から得たものは、藤本さんにとっても大きかったのでは……。 「抜きん出ている建築家が好き」という柴田育秀さんです。

■引っ張る

現在はリーダーとしてエンジニアチーム全体をまとめて引っ張る立場だが、エンジニアとしての仕事も当然している。建築家から相談を受けたら、そのエンジニアが担当するのがArup。エンジニア個人にオファーがあるのを推奨する体制です。柴田さんに来た仕事は、他のエンジニアにバトンタッチするのも増えてきた。「皆優秀ですからしっかりやってくれます」。

ビルディングエンジニアには、構造と設備のマルチサービスが求められている現在。そのニーズに応えられる組織を造りつつあるのが柴田さん。「セキュリティとファサードも、ライティングも取り込みたい」と頭の中はやりたいと思うことが溢れている。まず志向し、集中、ついには目的を達する。仕事が面白くてたまらないと語った。建築家としてのデビューには、もう少し時間が必要なようです。

■和太鼓とレイラ

柴田さんは秋田県横手市出身。広い家でバイオリンを習う恵まれた環境の子供時代を過ごす。そして「音楽で飯を食うか、建築にするか」と迷う程の音楽好きに。が、「優勝したら音楽でと、挑んだコンクールで、二位だった」ので、音楽を封印して建築を取る。やっと少し余裕ができてきたのでその封印を解いた。ずっとやりたいと思っていた「和太鼓」を始めたそうだが、趣味で終わらないのが柴田さん。3年前にはチームをつくり、ハワイ公演や書道家とコラボレーションなど、セミプロの活動をしている。全力投球は仕事のみではないとはスゴイではありませんか。

和太鼓奏者の逞しい身体づくりは、愛犬レイラちゃんと散歩に費やす。いつもアクティブな柴田育秀さんは、魅力いっぱいの枠に捕われない未来型構造家です。

